



第四十三号

発行日 平成二十三年一月一日
 発行所 海蔵山・崇福弘濟禪寺
 (岐阜市長良崇福寺町二)
 www.soufukujin.jp / soufukujin
 印刷所 岐阜 康文 社

○是什麼

住職・東海康道

本年もどうぞ宜しくお願ひ致します。

昨年は小納の干支、寅(虎)年について述べさせていただきましたが、今年は寺院(童子)が六回目の干支を迎えます。そうです、卯年なのです。十二支の二番目が寅、四番目が卯に当ります。小納が昨年着た赤いちやんちゃんこを、彼女は十二月に身につけるでしょうか？

「玉兔東に昇り、金鳥西に降



思付屋

思付屋

つ」というおめでたい兔(卯)に因んだ禅語があります。玉兔は丸い月を表しており、この

禅語は、そのままの悟りの妙相を表現しているのです。

ここに記載の御染筆は、山梨の慧林寺(快川国師が信長・信忠軍に山門上で焼き殺された寺)の現・南條大守老大師に因るもので、○(円相)と是什麼(これそも)と書かれております。「○、是れは何だ?」という意味です。

円相は、禅語でも禅画でもなく、悟りの当体を説明注釈にわたらず表現したもののなのです。しかし、床の間や茶掛けでお馴染みの語なので、その意味を知りたいと思われるのもこれまた人情でしょう。

強いて言葉で表せば、「仏性」、「父母未生以前における本来の面目」、「主人公」等と表されるのではないのでしょうか? 悟りの当体の仏性が真空無相、円満浄明であるので、円形(○)を持って形象化したものと思われ

これは何か、何と観るかとある以上、皆様方の御勝手であり、「おでんの卵、みかん、ぼた餅、お金……」と観ることも結構

なのでしようが、○(円相)に「是れなんぞ」とか、「円かなること太虚の如し」等と替がしてある場合、その円相は仏性そのものを端的に表していると観るべきだと思えます。

「玉兔」とは丸い月のことであり、存在そのものが仏性であり、○(円相)に通じます。私達衆生は、如来に近付こうとしながらも、実際には煩惱の苦界を小さな小舟の如く彷徨っているのが実情です。

苦を少しでも減退させ、苦を集めない様な生き方をしたいですね。そのためには、「空」(実体が無い・我が無い・形がない、囚われない)を感じることで、生ある中に、いかに「空」を感じるかです。そうすれば、少

しでも如来・円相(○)に近付けるのではないのでしょうか。

私も前述の如く、昨年還暦となり本来ならばこの円相(○)の境に近付いていなければならぬのですが、形だけがとりあえず還暦で、一回りしただけです。ずいぶん凸凹の○印だと自省しております。

今年から一歳、二歳と数えての再行脚の旅が始まります。頭を丸(○)めて……、いやいや頭は丸めておりましたネ!!

一月の掲示伝達

気がつけば
すなわち
雪の道

おわびと訂正

第三十九号(平成二十二年一月一日)にて、「用(金)いちいちちと誤むべきを、くずし字を間違っで解釈しましたので、破筆して下さい。おわびします。

出身僧堂・瑞泉寺

副住職・東海宏徳

こんにちは。副住職の宏徳です。檀信徒のみならずまにどこで修行してきたのかとよく訊ねられますので、私の修行した道場を紹介したいと思います。

愛知県犬山市にある瑞泉寺は、鶴沼から木曾川を渡り、すぐ左手の高台にあります。境内からの景色はすばらしく、木曾川の流れを見渡せ、西を見れば犬山城を望むことができます。この瑞泉寺の歴史は古く、そして由緒あるものです。一四一五年、日峰宗舜和尚が創建しました。当時、本山妙心寺は廃寺となっておりましたが、この日峰和尚が中心となって妙心寺を再興したため、いまでも瑞泉寺は「古本山」と呼ばれております。

崇福寺との因縁もあります。一五六〇年、崇福寺では第三世快川和尚が住職をされていたとさきのことです。岐阜城主斎藤義龍が別伝和尚とともに岐阜に「伝灯護国寺」を建立し、「美濃の妙心寺派の寺院はすべて伝灯護国寺の配下に属することとする」というお触れを一方的に出しました。これに反発した快川

和尚と美濃国内の妙心寺派の長老は瑞泉寺へと退去し、義龍、別伝と対決したのでです。

この事件の顛末は、義龍の急死により収束し、別伝和尚は妙心寺派から除籍されることとなりました。

少し難しい話ばかりとなつてしまいました。また機会がありましたら修行中の話なども書きたいと思えます。犬山には国宝犬山城、モンキーパークや木曾川ライン下りなど、年節を問わず楽しめる場所です。ぜひ足を運んでみて下さい。そしてその際にはどうぞ瑞泉寺にも立ち寄り下さい。若い修行僧の姿を見ることが出来るかもしれません。



(瑞泉寺山門写真)



(瑞泉寺本堂写真)

(妙心寺の心と美より転載)

平成二十三年・年忌御案内

- 一 四忌 (平成二十二年)
- 二 四忌 (平成二十二年)
- 三 四忌 (平成二十二年)
- 四 四忌 (平成二十二年)
- 五 四忌 (平成二十二年)
- 六 四忌 (平成二十二年)
- 七 四忌 (平成二十二年)
- 八 四忌 (平成二十二年)
- 九 四忌 (平成二十二年)
- 十 四忌 (平成二十二年)
- 十一 四忌 (平成二十二年)
- 十二 四忌 (平成二十二年)
- 十三 四忌 (平成二十二年)
- 十四 四忌 (平成二十二年)
- 十五 四忌 (平成二十二年)
- 十六 四忌 (平成二十二年)
- 十七 四忌 (平成二十二年)
- 十八 四忌 (平成二十二年)
- 十九 四忌 (平成二十二年)
- 二十 四忌 (平成二十二年)
- 二十一 四忌 (平成二十二年)
- 二十二 四忌 (平成二十二年)
- 二十三 四忌 (平成二十二年)
- 二十四 四忌 (平成二十二年)
- 二十五 四忌 (平成二十二年)
- 二十六 四忌 (平成二十二年)
- 二十七 四忌 (平成二十二年)
- 二十八 四忌 (平成二十二年)
- 二十九 四忌 (平成二十二年)
- 三十 四忌 (平成二十二年)
- 三十一 四忌 (平成二十二年)
- 三十二 四忌 (平成二十二年)
- 三十三 四忌 (平成二十二年)
- 三十四 四忌 (平成二十二年)
- 三十五 四忌 (平成二十二年)
- 三十六 四忌 (平成二十二年)
- 三十七 四忌 (平成二十二年)
- 三十八 四忌 (平成二十二年)
- 三十九 四忌 (平成二十二年)
- 四十 四忌 (平成二十二年)
- 四十一 四忌 (平成二十二年)
- 四十二 四忌 (平成二十二年)
- 四十三 四忌 (平成二十二年)
- 四十四 四忌 (平成二十二年)
- 四十五 四忌 (平成二十二年)
- 四十六 四忌 (平成二十二年)
- 四十七 四忌 (平成二十二年)
- 四十八 四忌 (平成二十二年)
- 四十九 四忌 (平成二十二年)
- 五十 四忌 (平成二十二年)

葬儀についての工夫

昨年仏教界を震撼させた大事件が二つありました。

一つは、鳥田裕己著「葬式は要らない」(幻冬社)の発刊です。親族葬、家族葬の増加、お別れ会のみ、挙行、火葬(荼毘)のみで宗教的な行事は一切なしという方々もおられます。情的、宗教的な面がどんどん薄れ、死を急がなければならなくなつてしまいました。

もう一つは、イオンのインターネット上での、布施額一覽の掲載問題です。各宗派からのクレームで、現在は掲載されていませんが、未だにその影響はあるようです。寺側と檀家・信徒との結びつきの希薄化、寺側からの説明不足、イオン側の商業化本位の問題点等々……

先ず後者についてですが、私がかつて説明させていただいておるとおり、布施と位階料は違うのです。当山は戒名料はいたたいておりません。禅宗では授戒をし戒名をお授けし、葬儀をすることが当然だからです。

一方、位階というのは、院殿号・院号・居士号・大姉号等を指し、本来は生前著しく寺に功績があった場合に、寺側からお授けしたのですが、最近では亡くなつてから、追贈でお願いされるのが圧倒的です。ですから生前寺に尽くせなかつた分を、まとまった金銭で納められることになる訳です。

位階料に対して、布施は全く違います。葬儀の導師への御礼や法事等の御礼は布施といいますが、梵語ではダーナ(他人に施し与えること)といい、これが檀那、檀家、檀家という語に変化したのです。ですから布施は心から施すことを言うのであり、○料ではないのです。お分かりただけでしょうか。

前者の葬儀については、葬儀の意味を御説明したり、葬儀のひとつひとつの意味を紹介しながら進めております。又、それぞれの施主さんの要望を入れさ

せていただいております。小さな子供さんに手紙を読んでいただいたり、お好きな曲を流す、生演奏を行なう、詩吟をしていただくなど、数は少ないけれど一工夫の葬儀もありました。

これからも皆様方からの御要望も取り入れ、心に残る葬儀にしていきたいと思っております。尚、立礼は仏教と関係がありません。看病疲れや体調不良、不慮の事故で家族を亡くされた場合等は、立礼等全く行なう必要はありません。どうしても必要がある場合には、代理を出せば十分です。

困られた場合には何でも御相談下さい。

寺宝館計画その後

平成二十一年七月一日の崇福寺報四十号で、寺宝館建設の御協力をお願い致しました。

その後、何回も何回も総代様達にお集まりいただきました。寺以外の所で、総代様達だけで会議をしていただいたこともあったようです。

その結果、後日筆頭総代様より、「社会的に経済状況が悪化しており、御寄進をお願い出来

る状況ではないので、機が熟すのを待っていただけませんか。」という報告をいただきました。

しかし、最後の小納の仕事という意気込みがありましたので、しばらくは悶悶とした日々を過ごしていましたが、ある時、「水は高きより低きに流れており、低き所より高き所に水を流すにはモーターで汲み上げねばならず、自分は我を張り、モーターで水を汲み上げようとしている様なものではないか……」と悟ったのです。これは無理ということも、長続きしないということも気付いたので、すると昔は減退し、心が楽になったのです。

「私が総代様達の会議で、文化財を守る事は大切なのだと発言させて下さい」とおっしゃっていただけの方もありましたし、「住職、御寄進の方はどうさせていたただいたら良いでしょうか？」等と声をかけていただいた方々もおられました。

何らかの形で、二十名以上の方々から御寄進をいただきましたが、前述の如く動きが中断致しておりますので、機が熟し建設促進の運動が再開されるまで、もう少しお待ちいただければと思っております。

文化財そのものを残すことは勿論ですが、文化財から発せられる往時の人々のメッセージや、こころの奥底を汲み取り、継承・伝承していくことが大切だと思います。

かつて静岡県知事だった川勝平太氏は、「日本の将来の理想像は日本の過去の中にあり、日本のモデルは日本である。」と述べられておりました。

文化財保護に、おひとりでも多くの方々の御理解をお願いします。

「ビハール長良」の諸活動

現在会員は二十二名で、檀信徒さん以外の方々も入会されております。毎月一回の学習会の他、老人ホーム、福祉施設の訪問、薬草園・百合園等の見学と食事会等を行ない、会員の親睦も図っております。

その他医療関係者等を講師に招き、一般公開講座（第三十九号、第四十二号参照）を開催したり、コンサートを十一月に行なったりしております。

最近では奉仕活動の一端として、ペットボトルキャップを集め、業者を通して、NPO法人「世界の子どもにワッチン」を

日本委員会に寄付させていただいております。

出来れば、花園会や花園会女性部の協力を得て、信長祭りにイベントが出来ないかと思っております。どうでしょうか。

尚、「ビハール長良」は市から表彰されましたので御報告申し上げます。



(表彰状)



(トロフィー)



(中日新聞より転載)

花園会・女性部・無相教会の

活性化を考えよう!!

かつては、崇福寺を支える組織の中心でしたが、停滞に近い状態です。皆で、組織の見直しをしないと、副住職が住職になる頃には消滅してしまうかも知れません!!



(中日ホームニュースより転載)

信長祭

信長祭りが例年の様に開催されました。

二日間共、APECの会議が部ホテル・グラウンドホテル等で開かれ、道路が込み合いました。



(岐阜新聞より転載)

崇福寺年間予定表

- ▲元日祝聖(寺のみ) 元日
- ▲修正会祈祷(寺のみ) 元日
- 年頭受け 元日、2日
- 大般若会 1月15日
- 防火訓練(北署合同) 1月下旬
- 御詠歌新年会 2月初旬
- 彼岸会 3月中旬
- 快川国師顕彰会 4月3日
- 花祭り 4月8日
- ▲ヨガスクール例会 4月10日
- ▲開山忌 5月7日
- ビハール長良公開講座 5月19日
- 平和の鐘 7月9日
- 棚経回り 7月10日頃
- 夏休みお経と坐禅の会 7月21日、30日
- 山門施餼鬼会 8月1日
- 崇福寺自治会施餼鬼会 8月3日
- ▲施餼鬼会(近福寺地区のみ) 8月5日
- 棚経回り 8月10日頃
- 信長祭 10月1日、2日
- ボトルキヤップ寄贈 10月26日

- どうだんつつじコンサート 11月24日
- 除夜の鐘 大晦日11時45分

- 寺報発行 1月・7月
- 花園会御詠歌練習 月1回
- 責任役員会 随時
- 花園会役員執行部会 随時
- 花園会役員総会 4、5月

- ……檀信徒のみ可
- ▲……指定者のみ可
- ……どなたでも可

- ビハール長良学習会(下宿、特待生)
 - 1月18日(火) 2月28日(月)
 - 3月23日(水) 4月26日(火)
 - 5月19日(木) 6月29日(水)
- (一般公開講座)
 - 7月21日(木) 9月16日(金)
 - 10月26日(水) 11月24日(木)

- (ボトルキヤップ寄贈)
 - 12月16日(金)
- (委員会・反省会)12時恵

- (喫茶法話(下宿特待生))
 - 1月20日(木) 2月18日(金)
 - 3月18日(金) 4月20日(水)
 - 5月31日(火) 6月13日(月)
 - 7月27日(水) 9月20日(火)

- 10月20日(木) 11月18日(金)
- 12月12日(月)

- (写経(本頁10時30分))
 - 1月17日(月) 2月9日(水)
 - 3月14日(月) 4月12日(火)
 - 5月11日(水) 6月8日(水)
 - 7月7日(木) 9月6日(火)
 - 10月13日(木) 11月10日(木)
 - 12月7日(水)



(故山長軒雄さんが生前中庭に植えられた千両の歌之)

日本電産KKの永守社長は、

海外二十八ヶ国に進出し、国内の会社を買収し続けておられるとの事。一人も首切りをされないそうです。六千人の社員一人ひとりにコメントを添えた賀状を出されるそうで、「ネアカイキイキ、ヘコタレズ」で三百六十五日働くのがモットー!!